

要 旨

1 背景と目的

日本学術会議は、2021年4月に取りまとめた「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて」で示された改革の方向性を具体化するため、科学的助言機能の強化を始めとする取組を進めてきた。特に、独立した立場から社会課題を発見し、中長期的な未来社会を展望した提言を行うため、「中長期的視点」「俯瞰的視野」「分野横断的検討」を重視した見直しを進めている。

一方、気候変動やカーボンニュートラルへの対応、新型コロナウイルス感染症への対処などを通じて、学術・科学技術に対する社会の期待や学術と行政の関係も大きく変化している。こうした状況の下、日本学術会議は第21期以降、学術振興の指針として「マスタープラン」を策定してきたが、社会環境の変化や、分野横断性・学際性、中長期的視点等に関する内外の指摘を踏まえ、第25期に従来の方式を改め、新たに「未来の学術振興構想（2023年版）」を策定した。

同構想では、今後20～30年先を見据えた19の「グランドビジョン」と、その実現に必要な「学術の中長期研究戦略」を提示した。しかし、その後の学術研究の進展や社会情勢の変化を踏まえると、一部内容の更新や新たな戦略の検討が必要となっている。そこで第26期科学者委員会学術研究振興分科会は、2023年版の基本的枠組みを維持しつつ、「学術の中長期研究戦略」の追加募集及び既存構想の改訂を行い、「未来の学術振興構想」の充実・発展を図ることとした。

2 「未来の学術振興構想（2026年版）」の策定経緯

「未来の学術振興構想（2026年版）」は、日本学術会議科学者委員会学術研究振興分科会が2025年3月に公表した改訂方針に基づき策定された。同方針では、多様な分野・視点を有する科学者コミュニティからのボトムアップによる提案を重視し、第25期に策定した19の「グランドビジョン」を基盤として、その実現に必要な「ビジョン」と「学術研究構想」からなる「学術の中長期研究戦略」を充実・発展させることを基本的な考え方とした。

これを受け、本分科会は、「未来の学術振興構想（2023年版）」に掲載された「学術の中長期研究戦略」を継続的に活用しつつ、新たな戦略の追加募集及び既存戦略の改訂を公募により実施した。その結果、多様な学術分野からの提案に加え、複数の研究コミュニティが連携する学際的・分野横断的な構想や、人文・社会科学分野が中核的に関与する提案等、広く199件の応募があった。提案された「学術の中長期研究戦略」については、本分科会の下に設置した未来の学術振興構想評価小委員会において審査・評価を行った。評価に当たっては、「ビジョン」の豊かさや実現可能性に加え、学術研究構想の学術的意義、社会的価値、成熟度、優位性及び必要性などの観点から総合的な検討を行い、併せて各戦略が「グランドビジョン」の実現に果たす役割についても評価した。また、提案内容や学術研究の進展等を踏まえ、19の「グランドビジョン」を基本としながら必要な見直しを行った。

さらに、本提言が日本の学術振興の方向性に影響を与え得ることを踏まえ、策定プロセスにおいては利益相反の排除と公正性の確保を重視した。提案者等は自らの提案の審査・評価に関与しないこととし、本分科会及び評価小委員会の委員についても提案への関与を制限するなど、公平かつ透明な審査・評価体制の下で策定を進めた。

3 グランドビジョン

本提言は、今後 20～30 年先を見据えた中長期的な視点から、日本が振興すべき学術の将来像を示すものである。ここで提示する 19 の「グランドビジョン」は、「未来の学術振興構想（2023 年版）」において、多様な科学者コミュニティからのボトムアップ型提案を基に策定されたものであり、本提言ではその基本的な枠組みを継承している。2026 年版は、学術研究の進展や社会環境の変化を踏まえつつ、各「グランドビジョン」の実現に必要な「学術の中長期研究戦略」の充実・発展を図るものである。

未来の学術を展望するに当たっては、既存の学術分野の枠組みにとらわれず、中長期的、学際的、そしてグローバルな視点から検討することが不可欠である。日本学術会議は、人文・社会科学、生命科学、理学・工学を網羅する科学者コミュニティとしての特性と、国際的な学術ネットワークとの連携を活かし、分野横断的かつ国際的な観点から学術の将来像を検討してきた。19 の「グランドビジョン」は、科学者の自由な発想に基づく提案を基礎としており、学術の本質である真理の探究を重視しながら、その成果を社会へ還元することを目指している。そこには、人間や社会への理解を深める学術、自然界の真理を探究する基礎科学、人類の健康や安全で豊かな生活に貢献する応用科学など、学術が本来有する多様で普遍的な価値が包含されている。

一方で、気候変動、カーボンニュートラル、サーキュラーエコノミー、感染症対応など、現代社会が直面する複雑な課題に対しては、個別分野のみでは解決が困難であり、従来の学問領域を超えた融合的な学術の発展が求められている。人文・社会科学分野では、歴史、文化、言語等に関する深い洞察とともに、デジタル技術を活用したデータ基盤の整備と知識共有が重要となる。また、生命科学分野では、生命現象の包括的理解を進めることで、精密医療、創薬、ワンヘルス（すべての生物の健康）の発展や、生物界全体のウェルビーイングの実現への貢献が期待される。さらに、持続可能社会の実現に向けたエネルギー、資源循環、革新的材料に関する研究、AI やサイバー空間、量子情報科学などの新たな学術領域の発展は、社会変革の基盤となる。加えて、量子ビーム科学や宇宙科学、理論物理学を始めとする基礎科学は、自然界の根源的理解を深めるとともに、多様な学術分野の発展を支える役割を担う。

本提言における 19 の「グランドビジョン」は、2023 年版で示された学術の将来像を継承しつつ、学術の普遍的価値と社会的要請の双方を踏まえ、未来社会の形成に貢献する学術振興の方向性を示すものである。

4 おわりに

日本学術会議は、2023 年 9 月に提言「未来の学術振興構想（2023 年版）」を公表した。

2023 年版で初めて提示された 19 の「グランドビジョン」は、多様な科学者コミュニティから提案された将来像を基礎としながら、さらに分野横断的・俯瞰的な視点から整理・体系化されたものである。一方で、当時から継続的な検討や将来的な更新の必要性も指摘されていた。さらに、2024 年に開催された学術フォーラムにおいても、学術研究構想及び「グランドビジョン」の実現に向けた課題が議論された際に、学術の進展や社会・環境の変化に応じて構想を継続的に発展させることの重要性が改めて確認され、その後の学術研究の進展や社会情勢の変化を踏まえ、2023 年版を改訂することとなった。なお、2026 年版では、一部の「グランドビジョン」については、名称や記述内容の更新は行われたが、基本的枠組みを継承し、19 のまま削除・追加はせず、その実現と一層の充実に必要な「学術の中長期研究戦略」の追加募集及び既存戦略の見直しを中心に、未来の学術振興構想評価小委員会の審査・評価を経て、改訂を行った。

本提言は、日本の学術振興の中長期的な指針として、多様な学術分野の発展と分野横断的な連携を促進するとともに、学術政策や関係省庁、大学その他の研究教育機関における具体的施策や取組の推進に活用されることを期待するものである。さらに、広く社会に共有されることで、学術と社会の対話を深め、未来社会の創造に貢献することを期待してここに提言する。